

日本建築が欧米のモダニズム住宅に与えた影響に関する研究

日大生産工 ○亀井 靖子

1 はじめに

昨今の住宅では畳部屋がどんどん減少し、和室と呼べる部屋が新設されなくなってきた。しかしながら和室は日本の住まい方と大きく関係しており、さらにブルーノ・タウトの著書にも記されているように、その価値は世界的に知られるものである。日本の建築文化・住文化を鑑みるならば、和室の価値を再確認し、今度も継承されていくよう努めていく必要であろう。

和室の世界遺産的価値は、日本の住文化に触れた海外建築家の住宅作品に見つけることができる。しかし、海外の建築家が和風建築や和室を設計すると、どこことなく違和感を覚えたり、和を全く感じさせない空間となったりする。それは海外の建築家が和風・和室から住まうに重要と思われる要素を取捨選択しているからであろう。極端に言えば、海外建築家が設計した住宅に残された部分は国・文化を超えて住むことの根底に通じる特徴であり、捨てられた部分は日本でのみ通用する特徴であると考えられる。そこで、海外建築家が日本文化の何に魅力を感じ、自らの住宅設計にその要素を取り入れているのかを明らかにする。

本報告は、その導入として、今後の展開を深慮することを目的とし、アメリカのモダニズム住宅に関連する書籍、雑誌等から和室に関する箇所を抜出す。

2 調査結果

2-1. カリフォルニアのモダニズム住宅

フランク・ロイド・ライトは日本建築や日本芸術に興味関心を持った建築家として有名であるが、次世代以降の建築家にもその影響を受けたものが少なくない。図1はサリバンとF.L. ライトの建築家系統図^{文1)}である。F.L. ライトの右腕ともいわれたルドルフ M. シンドラーや、

彼の事務所で働いていたグレゴリー・エインもその一人である。既往研究^{文2)}で明らかにしたエインの住宅作品の特徴は、1) 採光窓、2) スライディング・ウォール、3) 内部空間と外部空間の連続性、4) モジュールであり、これらは1) 欄間、2) 襖・障子などの建具、3) 縁側などの内外を繋げる空間、4) 畳モジュールなど、和室の特徴と共通する。

その他、R. シンドラーは、障子などの建具を使って空間構成したキングスロードの自邸（1922年）を設計している。また、同時期に活躍したイームズ夫妻は、ケーススタディーハウス # 8 としても有名なイームズ邸（1945-49年）に、提灯似た照明を飾り、リビングではお茶会を開催しており、日本建築の影響を受けている住宅として挙げられる。

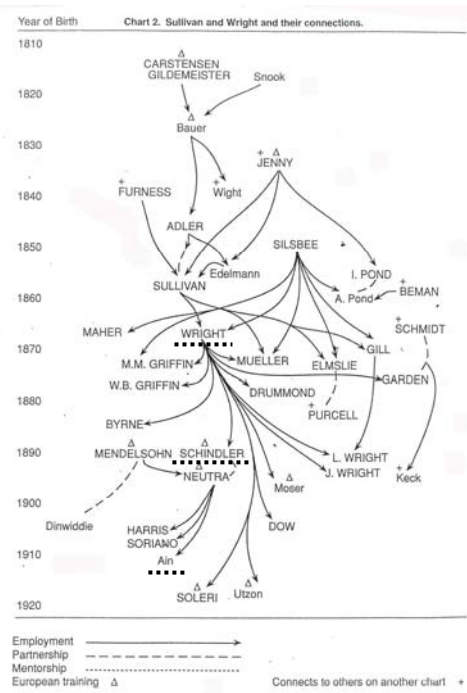


図1 サリバンとF.L. ライトの建築家系統図

Study on the Influence of Japanese Architecture onto the Western Modernism Housing

Yasuko KAMEI

2-2. ニューヨーク近代美術館の影響

1940年代後半から1950年代中ごろにかけて3回、ニューヨーク近代美術館では原寸大の住宅を展示する展覧会が催された。そこではグレゴリー・エインの可動間仕切り^{注1)}を使用した続き間住宅が展示されている。さらに1954年には吉村順三が「松風荘」^{注2)}を設計担当し、MoMAデザイン部のアーサー・ドレクスラーが、1) 柱と梁による基本構造、2) 空間の融通性、3) 屋内外の一体感、4) 構造自体が生む優れた装飾性^{文3)}に言及している。その後もMoMAでは日本に関する展示が行われている^{文4)}。

2-3. Art and Architecture誌 (1948-1954年)

カリフォルニアを中心に建築界やデザイン界に影響を与えたArt and Architecture誌には、日本の家具や空間についての記事も多く扱われている。表1はTASCHEN復刻版1950～1954年の写真・図面から、建具(引戸など)、日本の家具、日本グッズ、日本人建築家名を抜き出したものである。

可動間仕切り(引戸)を使った住宅はどの年も数件掲載されており、間仕切りを開けることでリビングを広く使うことができるようになっていたものが6/11件と半数以上ある。それ以外は寝室との間を隔てている可動間仕切りである。日本の続き間の使い方と非常によく似ている。

家具については、1953年にSukiyaki Tableと説明書きされたローテーブル、Japanese Samurai Standと紹介された折りたたみ椅子などが掲載されている。また、図2、3に見るように1954年の雑誌表紙には、姫だるま(2月号)とそろばん(9月号)が使われており、当時の日本ブームをうかがい知ることが出来る。

3 今後の展開

時代はさかのぼるが、1893年に開催されたシカゴ万博の木造日本建築の影響を受けて設計されたギャンブル邸(グリーンアンドグリーン)(1908年)やF.L. ライトのハナハウス(1936年)も日本建築の影響を受けた建築として興味深い。

一方で、日本の住宅建築で現代の和室から失われた要素を明らかにすることも、和室の価値を次の世代に継承する際に必要と考える。住ま

い方の変化とともに変わってきた和室構成要素について、今後年代を追って明らかにしたい。

表1 TASCHEN復刻版1950～54年の図と写真から抜き出した日本建築に関する要素

年/項目	建具/可動間仕切 L: Living Room B: Bed Room D: Dining Room	日本人建築家	日本家具 (件)	日本グッズ (件)
1950	2 Hall/L 不明	1 ジョージ・ナカマ		
1951	2 B/L B/B			
1952	2 B/L D/L	1 イサム・ノグチ	3	
1953	3 Study/L B/L 不明	2 イサム・ケンモチ アキラ・シンジョウ	3	2
1954	2 B/D B/B	2 カズミ・アダチ イサム・ノグチ		3

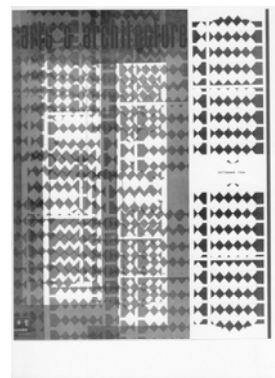
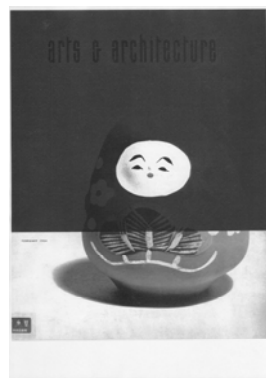


図2 1954年2月号表紙 図3 1954年9月号表紙

「注」

- 1) 居間と主寝室の間にフォールディング・ウォール、2つの寝室間にスライディング・ウォールを用いた、可変性のある平面を持った住宅である。
- 2) 園城寺光浄院客殿を元に設計した。

「参考文献」

- 1) Roxanne Kuter Williamson: American Architects and the Mechanics of Fame, University of Texas Press, March 1991
- 2) 曾根陽子(主査): 50年後のマー・ヴィスタ・ハウジング・グレゴリー・エインの郊外建売住宅・団地の変遷―、研究No.0417、財団法人住宅総合研究
- 3) BARRY BERGDOLL and PETER CHRISTENSEN: HOME DELIVERY Fabricating The Modern Dwelling, The Museum of Modern Art, 2008
- 4) 山崎泰寛、松隈洋: ニューヨーク近代美術館「日本家屋展」に見るキュレーターの役割―アーサー・ドレクスラーの仕事を中心に―、日本建築学会計画系論文集、第78巻、第688号、pp1441-1446、2013年6月